

1927

東 京 圖 書 館			
七 五 冊	七 八 號	二 六 函	和 書 門 小 說 類

繪本通俗三國志

四編

二



繪本通俗三國志四編卷之二

目錄明治十年交換

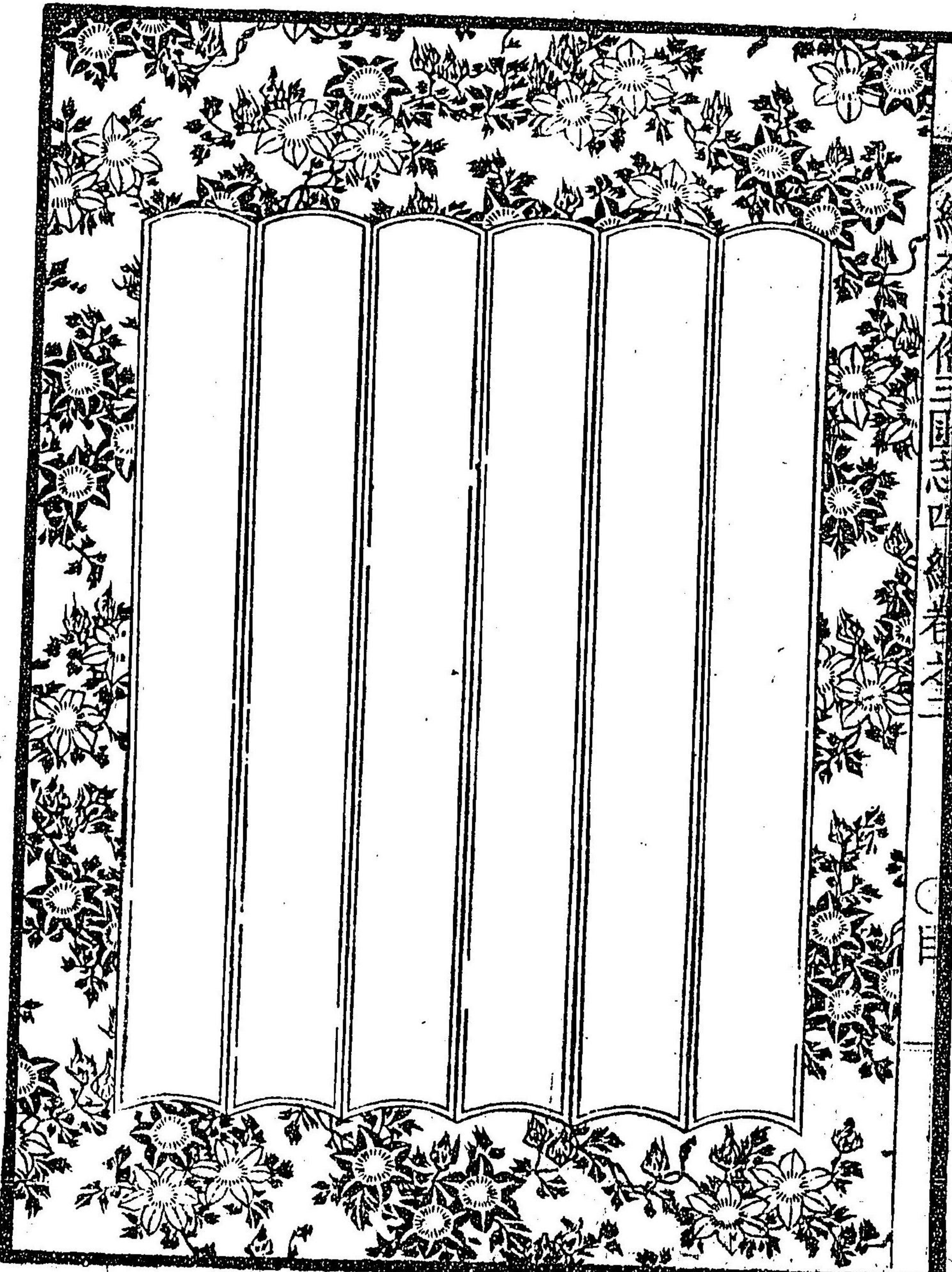
曹操三江調水軍

七星壇孔明祈風

周瑜赤壁鏖魏兵

曹操敗走華容道

39



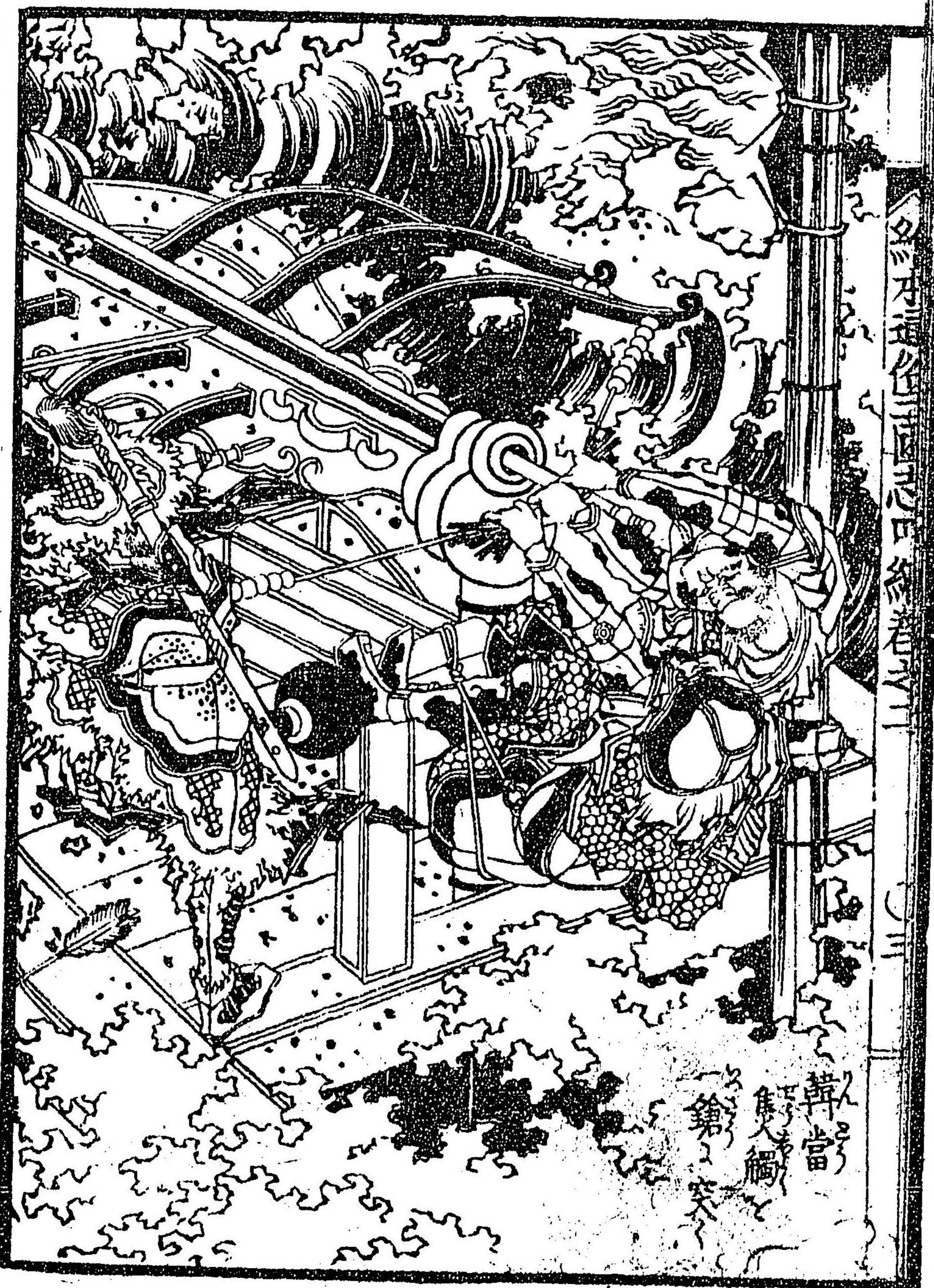
繪本通俗三國志四編卷之二

曹操三江潮水軍

水軍の總大將毛玠干禁二人曹操來り見へ大小の兵船
 鉄の鎖をめぐりてめぐりて排列し。武器兵糧の用意まで。一齊
 してあたまの早く日て定めて兵を攻めんとし。曹操は
 水寨の中央の大船に坐し。文武の大將をのりて。前手
 分て定む。舟手の中央の黄の旗を立て。毛玠干禁の前手
 へ紅の旗を立て。張郃後備の阜まき旗を立て。呂蒙左備
 へ青まき旗を立て。文聘右備の白まき旗を立て。呂蒙左備
 路の前手へ紅の旗を立て。徐晃後備の阜まき旗を立て。陸
 李典左備の青まき旗を立て。樂進右備の白まき旗を立て。

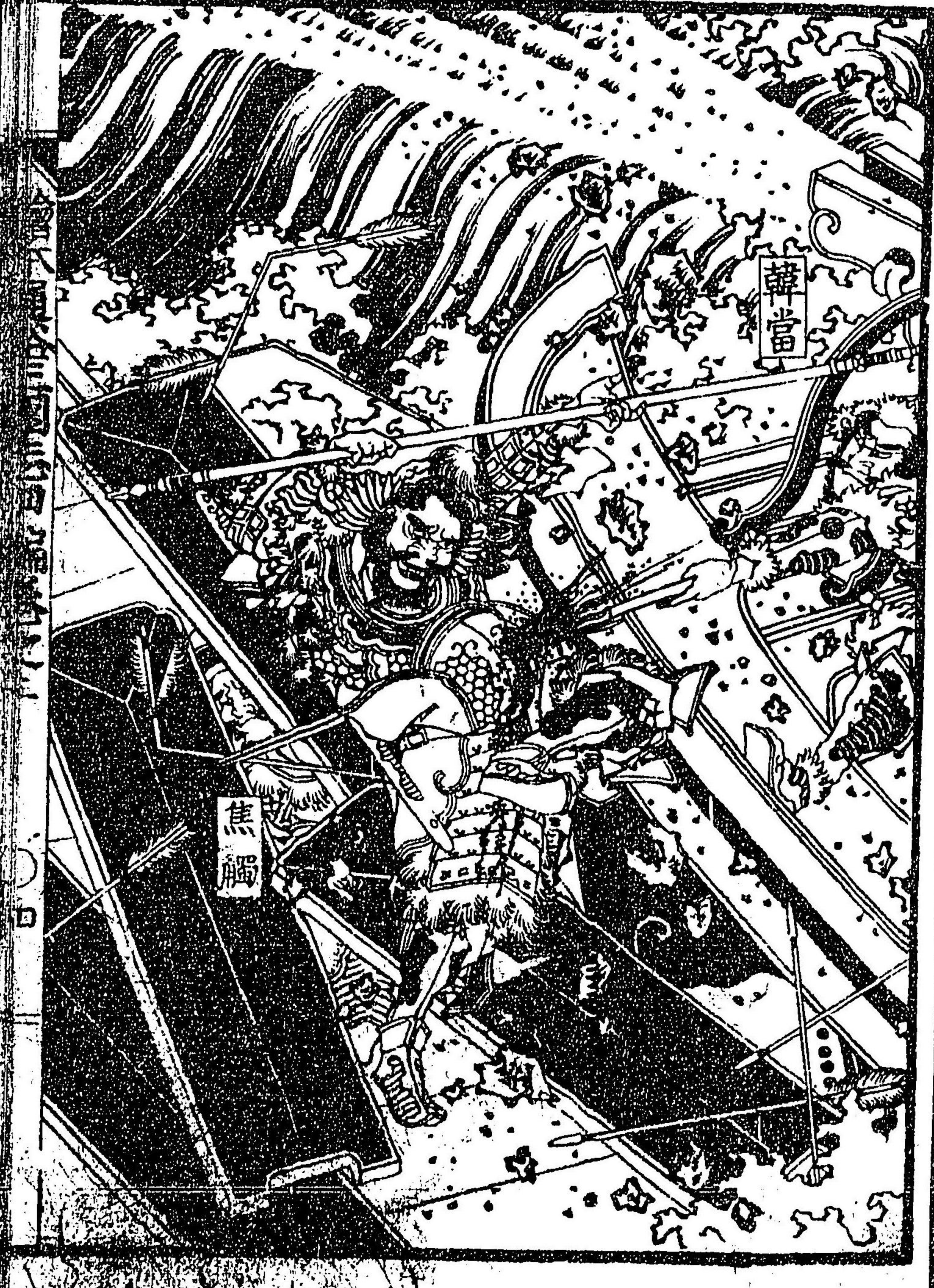
夏彦彦水陸の救應使の夏彦彦曹洪護衛性來監戰
 使の許褚張遼を以て宗徒のよのこしとす。その外の驍將
 伍で守と排列し。水寨の三通の鼓を打ち進め各隊門を分て
 兵船を掉出し。渺たる三江の水面に次第と乱とを陳て張と
 西北の風をびく吹と白浪天をさざりし。五十六鎮
 軍勢を勇躍して鎗を使ひ戦とせり。曹操を以て見
 と。の内々の喜び呉を滅びんと掌の中にあつとぞ。かゝる
 斯く訓練とせり。果と巡遊使性來しと下知とほし。との
 次第とせり。水寨の旗の色を別とす。別とす
 余艘の小舟を以て。左右前後の便と通と二十四座の門を
 尽く

曹操諸將を以て曰く。鳳雛が計を得とんが。安ん
 ぞ。の天の助とす。浩と風波を動とす。人馬平地を行とせり。南方の岸を以て。一擁とせり。攻上
 とん。なまじく。拒とん。程昱とみ。出と曰く。兵船を
 鎖とめて。連糸と入。穂とす。好と入と。敵と火と。火
 攻と。遠き慮と。惜とす。兵と用と。法と。荀攸
 が。曰く。某と敵と。火攻と。伯と。程昱と。兵と用と。の
 法と。曹操と。曰く。大将たる。天の時
 と。地の理と。察と。十一月の末と。



三國志卷之十一

韓當
騎人觸
鎗



韓當

無鬚

三國志卷之十一

のらりと飛らゆりた。一刀は張南を水中に斬り落し、さへんぐみ
 華やまらむ。曹操が勢二人の大將を討とむ。先より外回
 る韓當周泰、勝みのゆい追討の鬼りかまむ。半途より文聘
 がさへんの船に合ひ時、ゆるまむ。攻戦へさへんむ。引立たる北
 國勢、大波の氣を奪まむ。さへんむ。なまむ。退きんむ。文聘は
 ひよ叶を北とさへんむ。さへんむ。討まむ。の數をさへんむ。周瑜は山
 の上より望みたる。江北の水面上、曹操が兵船がびびりて
 あり。旗の色がさへんむ。さへんむ。次第にさへんむ。一同に攻むる。体あり
 り。文聘が逃さむ。と。長追めり。さへんむ。金で鳴り。白
 き旗をさへんむ。さへんむ。韓當周泰は軍がさへんむ。回りりり。
 文聘がさへんむ。命を扶り、回りり。曹操がさへんむ。焦觸張南が討れ

たるよしと告げ、曹操は快く、さへんむ。喜む。周瑜は山の上より
 江北をのぞき、今日戦ひ、打勝つる。さへんむ。曹操が舟は、芦葭段のま
 げまの異あり。さへんむ。破る。さへんむ。さへんむ。北を望
 んど居たる。曹操が舟の中央に立たる。黄ある旗、忽ち風
 む吹と、水中にたむ。さへんむ。周瑜は大笑ひ。さへんむ。戦ふ。さへんむ。
 先は天未漸、凶を示し。さへんむ。さへんむ。曹操が舟は、焦觸張
 南が討まらる。上は中央の旗折たり。さへんむ。上下は色を先入
 曹操がさへんむ。旗をさへんむ。旗のさへんむ。取沙汰し。さへんむ。
 のらりとさへんむ。さへんむ。即時は首を刎んと下知り。さへんむ。軍中
 とのさへんむ。静りたる。周瑜がさへんむ。山の上は立。江北を望む。さへんむ。
 まち一陣の風を向より。白波岸を拍ぐ。立たる旗。周

曰く天不測の風雲あり況や人間はとてや周瑜の
 言をまじく色と夫をいさあつら申吟の声々あつた孔明
 曰く都督の心中もあつた類か〜もいさあつた周瑜曰く
 孔明曰く涼劑を治す人周瑜曰く
 涼劑をやちめつた〜もいさあつた孔明曰く
 曰くこの氣を理めど氣も順ある〜もいさあつた孔明曰く
 然も治さる周瑜孔明の智慧深きものあつた
 病根をき〜もいさあつた孔明曰く
 探ひ曰く氣を順する薬いさあつた孔明曰く
 曰くこの良方あり〜もいさあつた孔明曰く
 平安あり周瑜容を正〜もいさあつた孔明曰く

孔明紙筆をもつ傍の人と退け。ひそひそ十六字と
 書し欲破曹公互用火攻萬軍俱備只欠東風と寫
 し〜周瑜あつた。孔明の神通を得た。孔明
 孔明の量り告げ〜もいさあつた孔明曰く
 竟尔〜先生も其が病源をきり〜
 事急あり〜治ま〜孔明曰く某
 不才よ〜異人よ〜門遁甲の天書を傳
 授せり上の風を呼雨を喚鬼を使ひ神を役〜中陣を布
 兵を用ひ民を安〜國を定〜下〜
 避身て全〜言を逃〜都督も〜東南の風をのぞ

九尺より三重の構へ百二十人の士卒を擇んで手どし
 旗をとりて四面をめぐらし其壇の上を祀りて三日三
 夜がぬいど東南の大風を借り周瑜が曰く三日三夜のゆき
 と死一夜の大風を得て計りあむを成就せん事をとぞ
 うあらずも延引のえらむを孔明が曰く十月二十日甲子
 の日祭りあむを二十二日丙寅の風をまらち息し周瑜大
 喜び精兵五百人とさし壇を築せ別を百二十人の士卒をえ
 らんぞ孔明のあはれ風も吹走らば早も攻蒐るべしといひ
 らるべし孔明の魯肅ととも馬を早め南屏山といふ地形
 せし定ぬ東南の方の赤土をとりて方圓二十四丈より高き三尺

三重の壇を築て下の二重より二十八宿の旗を建て東の方を青き
 旗角亢氏房心尾箕斗倉龍の形を布北の方を白き旗
 斗牛女虚危室壁玄武の勢ひとあし西の方を白き旗
 奎婁胃昂畢觜參白虎の威を振南の方を紅の旗并
 鬼柳星張翼真軫朱雀雀の状とあしとも四七二十八面あり
 二重より六十四面の黄あり旗を立て六十四卦を書く八位は定
 り上の三重より東髪を冠と載ひて早き羅の袍と著し鳳
 衣博帯朱履方裙あるもの四人を立て左の一人は長き竿
 でのりて雞の羽をとさし風を招くの志ありと右の一人は七
 星の帯と繫たる竿を持風の色とあらうとむ後の二人は
 宝剣を左よりさし香炉を右より持壇より下より旌旗宝蓋

新編 太平御記 卷之二十一

孔明
周瑜
病源と
的察

孔明



周瑜



大戦長鎗白旌黄鉞朱幡阜毒縣と持たざるもの二十四人。四方を圍んで護衛をあそとせよ。七星壇造す。身と清ら道服を被り。髪をきかまき洗ひ。壇の前より。土月二十日甲子の吉日といふ。孔明齊戒沐浴して。身と清ら道服を被り。髪をきかまき洗ひ。壇の前より。曾肅より。御辺の本陣へ行て周瑜に兵をよのへ。其の因祭にあそ。も。東南の風吹起。早に攻蒐のの念し。壇の上り。孔明の護衛の士卒より。各々方位とせよ。頭とせ。人物熟とせ。又。怪とあり。き。法は。立。斬。緩歩。壇の上り。香と焼水で注ぐ。天と祭り。志ぶく。祝して。又。

壇で下り油幕の中を休息し。士卒うらぐ。鮫と喫せし。又壇の上り。三度祓り。風いよ。起。周瑜の程。曾肅亦本陣のめ。東南の風起。早に攻蒐とせ。吳主孫權の由と報。黄蓋。二十艘の快舟を用意して。舟の頭を大釘で。打内。青布の幕を四面に張。兵糧を。舟の上。青黄の牙旗を。各々舳を走。水。精兵二百人。用意。大將軍の。下。時。待。甘寧。蔡仲と水寨の中を居て。一人も陸のあ。毎日酒を飲。

下りたる壇と下り油幕の内は休むも丁奉は壇と下りたる徐盛も舟手よりせまき油幕をひきのけ孔明をたぶらむは行方とてきつる日まがされ体のものこそあやむは遠く落行たがね殺せや兵どもとて四方を散く搜しけるが岸の辺より人の男のあひのやうに人を通りつる問が昨日の暮方より早舟一艘前ある離のり孔明をたぶらむは長髪とてきたるの舟のり北とてさうく生ぬ入りて答ふまは何程も入だつたまう追付よとて丁奉の馬を飛して陸路よりまき徐盛の舟と早めて探ふもんをたぶらむは向ふあたりに一艘の小舟あり徐盛もまき孔明をたぶらむは舟をたぶらむは

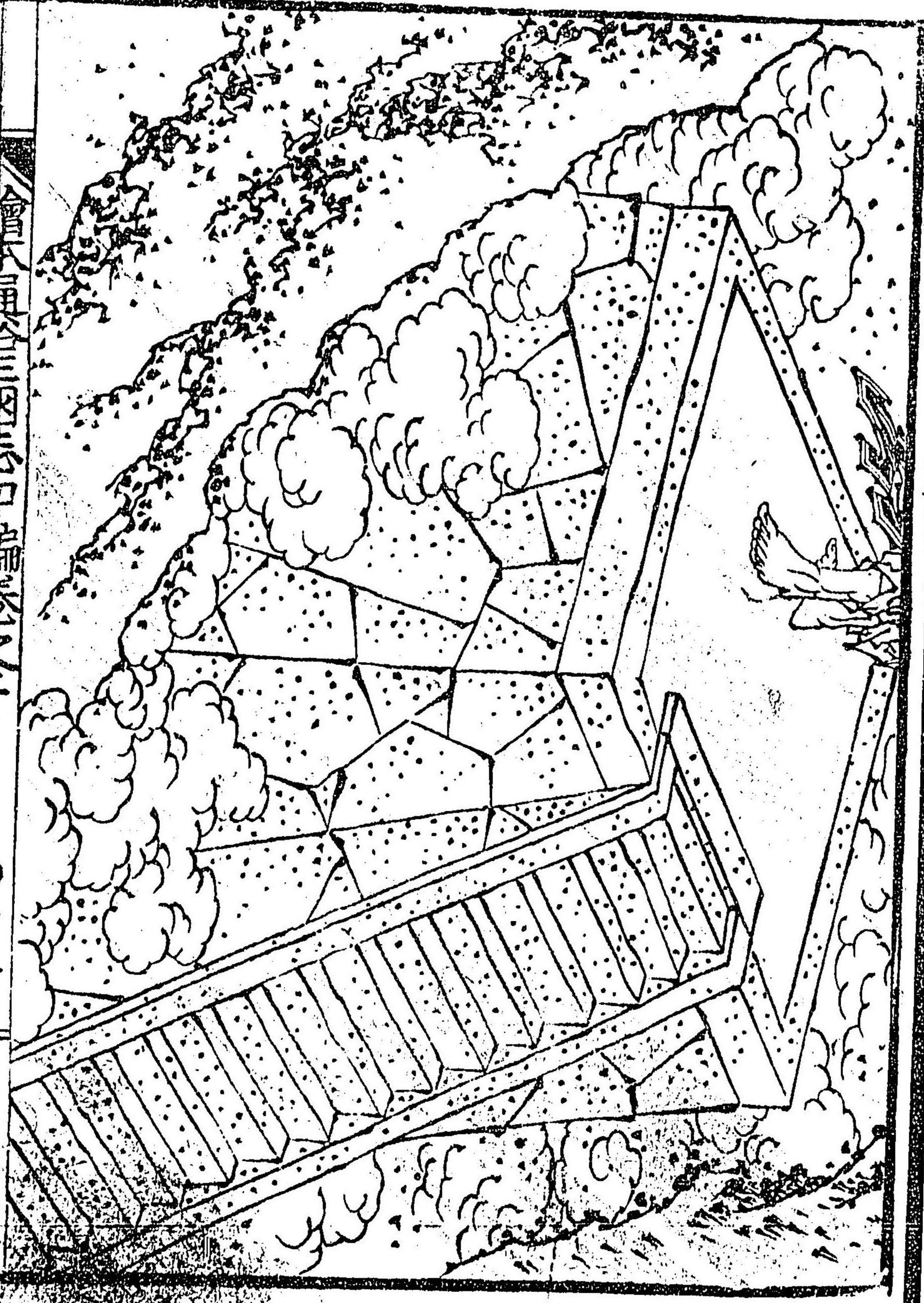
菟交ハ近くありし船の頭ま立生孔明志が住りの周都督一大事の使のりよまがり孔明舟ま立舉り大に笑て曰く御辺のぶくもまきまき来りたり早く回りに周瑜を報東南の風も已まきたり早と菟交の入りてまき今まきく復口の回る他日再び相見へんとて舟で早めらるる徐盛又曰くまきまき舟とてまき人事の急ある義論あり孔明が白くまきまき周瑜が害せんとして量り大将趙雲とてまきまき復口の回らんとして近付て誤らるるまき徐盛の孔明の舟の帆をまきまき追付んまき程近ありて忽ち孔明が舟より一人の大将らまきまきまき立あつた大音もびて曰くまき常山の趙雲あり劉皇

新編 水滸伝 卷之三十一 四 五



孔明

七星壇孔明新



孔明新

四

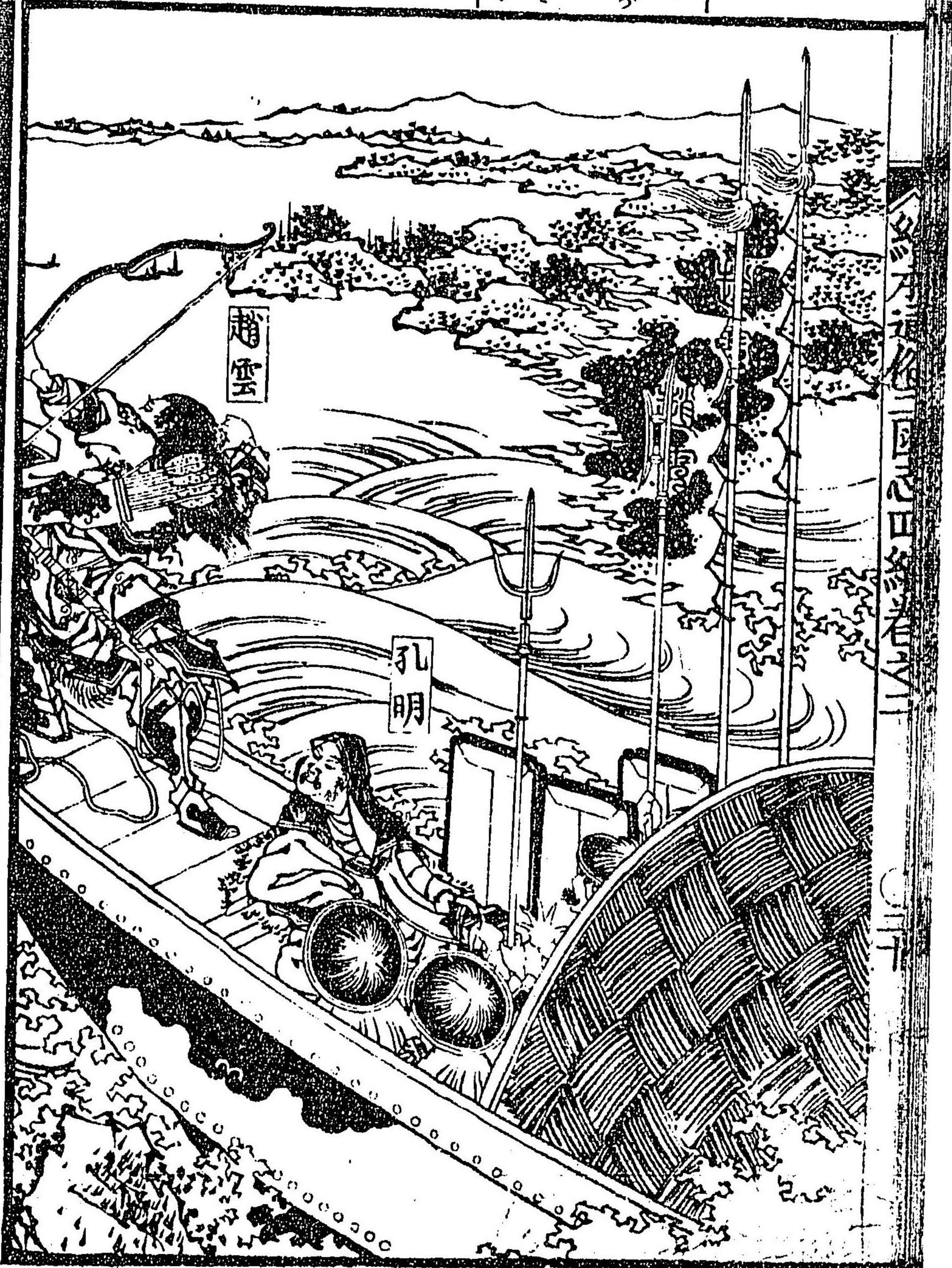
烏林の道に出ると蔡仲が旗をうけてさして曹操が兵糧を貯へ置たるあり行火をうけて攻蒐ま又蔡和軍中にも置て別用するものなりひるま甘寧計と受蔡仲と案内者として烏林とさして出さるの第二は太史慈とよび汝の三千余騎を多く黄カスの界に出曹操が合肥の勢とさ入きうて火を付て曹操の本陣を攻よ紅の旗をひるるとは呉侯の旗下の勢ありてさして第三は呂蒙とよび汝の三千の兵を率して烏林を行て甘寧と一手あり曹操が陣を焼く第四は凌統とよび汝の三千の勢を引いたち夷陵の界にいたり烏林は火の掛とよびさしてさして攻破を第五は董襲とよび汝の

三千余騎を引いて漢陽より漢川に出曹操が陣を斬て入自旗とよびさしての味方とありて第六は潘璋とよび汝の三千の兵を引いてさ白き旗とさして漢陽をひいて董襲とよびさして曹操が陣を攻蒐まてて手分とよびさして六隊の軍馬路とよびて打立る陸路の味方此のどとよびさして舟手の先陣黄蓋のひそる曹操が方へ人よぼさして今夜の三更に兵糧をぬきんと馳来るべし青竜の牙旗とよびさしてさしたる舟とよびさして黄蓋が降表の舟ありてさして旗を注進せば火船二十艘の兵船四艘の跡を繋打続て第一の備に領兵軍官當第二の備に領兵軍官周泰第三の備に領兵軍官

虚々実々の端ありて、まじき事ども、曹操よく兵と用ひて、人
 ども此のよきせむ。あつたむのち、もて得ん山路は、烟のあつた
 とき、まじき事ども、勢ひと張る人あり。体は、まじき事ども、あ
 とき、まじき事ども、あつたむ。路は、まじき事ども、御辺、あつたむ。放
 余騎と率一と、華容道をせむ。人、玄徳の曰く、関羽本
 すり、義気盛人のまじき事ども、曹操の生合とも、期よのぞん
 であらうあつたむ。放さん孔明の曰く、某よく天文とて、まじき事ども、曹
 操が運命、いよ、まじき事ども、滅ぶまじき事ども、兎角、関羽がん。ま
 じき事ども、曹操が恩を受けたるもの、まじき事ども、あつたむ。まじき事ども、あつたむ。ま
 じき事ども、人情とあつたむ。まじき事ども、玄徳の曰く、先生の神筆、世よ、まじき事ども、あつたむ。

あつたむ。孔明の曰く、明日大雨降く。後曹操あつたむ。華容
 道を走るべし。去来を樊口へ行。周瑜が計と用ひて、見
 物せん。まじき事ども、孫乾、竹間、雍とて、まじき事ども、城を守らせ。まじき事ども、山
 のまじき事ども、望こする。まじき事ども、あつたむ。曹操の陣中、まじき事ども、あつたむ。諸將と
 まじき事ども、あつたむ。計と論。黄蓋が降参して、侍る。東南の風吹、あつたむ。味方の
 まじき事ども、あつたむ。程昱の曰く、今日、俄に東南の風出たる。味方の
 まじき事ども、あつたむ。不吉あり。丞相よく察し、まじき事ども、人。曹操の曰く、冬至、まじき事ども、一陽
 まじき事ども、あつたむ。来復のとき、まじき事ども、あつたむ。東南の風吹、まじき事ども、あつたむ。當
 れり。あんど、あつたむ。又あつたむ。まじき事ども、あつたむ。忽ち、江南より、小舟
 まじき事ども、あつたむ。黄蓋が使あり、まじき事ども、あつたむ。密書とて、まじき事ども、あつたむ。曹操の
 まじき事ども、あつたむ。周瑜が法令、まじき事ども、あつたむ。まじき事ども、あつたむ。まじき事ども、あつたむ。

趙雲の船の帆を
徐盛と
鉢と



孔明の船



徐盛の船

車輪のどくある船空中に飛揚る曹操大膽と冷した。陸の陣でのぞきこむ二同火掛りの火船を援舟でかくやく逃んとも黄蓋の小舟に乗乗烟の内火の中にもうた曹操を生取らんとながぬる。四五人跡はぼびて力ぞと入りまをいやく走散りて尋ねる曹操の事の急あることごとくいじく岸よのちとんと身で操ある張遼小舟を推来り大船よりなまけ下りてあうくは逃まらる黄蓋の曹操を逃さざらさうらまのそ尋ねるあふ聲を袍と被たるもの大船より下らまはるあうらんとあひまらる舟を飛して手は刀をひきまげ曹操逃るとあつと黄蓋のあつものごとくあつりらま曹操逃らなうらまあひまらる若しげまらひらり黄蓋のあつと近有

曹操が舟より張遼弓を取て兵と射る黄蓋火の光乃中よあつと急音のびくきき急を避んと走らるがその夫肩先よあつと急所の痛手よあつと水中に落入り水寒しとぐく火あつとで百万の軍勢上と下へとさざあは喊の声天を碎くがごとく左より韓當右より蒋欽赤壁の西より討て出右よ周泰左よ陳武赤壁の東よりと出し中央より周瑜程普徐盛丁奉叔方の舟とあつと連綿度としさへる北国勢かよあまきとと攻らりら水よとあつと火も焼れ鎗よ突と矢よ中りたるものおびて射がとと名付と世の人の口実と三江の水戦赤壁の慶金兵とトイけり。

新編 魏志 卷之三十一

曹操敗走華容道

吳の大將韓當、勢ひのついで、水寨を攻る。跡より士仁、
 報じくたす。韓當の勢ひ、船の上より入る。將軍の字を告ぐ。
 韓當は、高義を以て、上
 のものより、黄蓋あつて、
 果しく、黄蓋あつて、肩あなりの、
 陥入る肉の中、あつて、
 鎧を脱ぎ、旗を裂き、瘡を束ね、
 著せし舟のせき、国を回す。黄蓋が水練を得た
 るの、痛平を負う。寒気にあつて、鎧を脱ぎ、
 舟の、その身は、陸の陣の甘寧、蔡仲と。

案内者より、曹操が陣屋の、
 付て、喊の声をあげ、呂蒙あつて、
 火をけ、勢ひのついで、
 四方を、火を掛鼓で、
 岸の上の百騎、
 不あけ、
 文聘が、
 走る、
 勢追掛曹賊、

新編 魏志 卷之三

旗をさし生と曹操大軍とぞんた張遼の跡を拒がせ急
 ぎ逃んとせよと又向より山際を火を以て一簇の勢を起し
 凌統もあつて馬より下り降参せよとさるる前後で用
 で攻めしる曹操勝やいなと横をぬき走るを忽ち一
 手の軍馬をせ来り曹丞相拍まき入りのあつれ徐晃もあ
 りて名乗て曹操をさし入しし。兩軍入をなまそ戦ひ道
 で尋ねて走りぬる呂蒙凌統ぞゆきく打勝て長追
 とせせりる曹操南でのぞんで走るを一彪の軍馬山を以
 て陣を取敵うとせよと左にあくと本へ表紹が大將も
 曹操を降り馬延張顛二人あり北国の勢二千余騎
 と引てそのあつ陣を取らるる今夜俄る火の起るてやと

志しも散を相待たり曹操もあつて喜びての勢をゆせ
 馬延張顛も千余騎であつて道を行きぬる。後
 陣もあつて洛行ひぬる時心少く女あり千里をりて經
 て一手の勢を道で塞ぐ馬延もあつて出と。あつて問
 へ人の大將大音あつて甘寧あり。まゝるよと力と
 受よといひもあつて一刀も馬延を斬張顛も逃てて鎗
 での縁にて突く菓も甘寧を以て突く又張顛を斬落
 し。きんぐも討破しる曹操もあつて南夷陵へ
 入るる。西をさして逃走るを張郃路もくをせ加
 かりもあつてあつち後陣を打せ鞭を加へて走りぬる。夜
 にも五更の比に到り火の光もとてありぬる。

周瑜
曹操
水陣
窺

會天風合三國水陣



會天風合三國水陣

んと定めたる何れかと問ひ判りての答曰く鳥林の
西宜都の北あり曹操馬上より山川峻しく樹木茂るるの
ぞと天を仰ぎて大笑し諸大将問曰く丞相あはれ笑
ひのし曹操曰くは別人ぞと云ふもあはれい人周瑜計
あり孔明才浅きと笑ありは是れ一兵てやちひびまは
るる休兵し落行敵とのまさを討んその言いも卒にさ
るる両方より大鼓を打て火の光天を焦し一鹿の軍馬にけ
出常山の趙雲ありありと相待とよづりひまは曹操大驚
ひてさや馬より落んとす張遼徐晃力て尽しと拒ま
るる曹操辛き命を扶り火を冒し烟を突く落延なり趙
雲十分は打勝敵の旗物の具を奪ひ古より師師勿掩

れと入り長追あせととく兵を収めて引回るとは夜は明方
までさや黒雲地を襲え東南の風のほど休を俄に大雨車
軸のどく降来と衣を湿し甲をぬいで寒気甚がなま
兎角しく二時をたつとさや行はるる辰の刻のなりと雨風
一度は定り諸軍勢をいづく飢疲を身の上すもさや
もあはれ曹操馬より下とてその辺の在家は兵を打て食物
を奪ひてさや山の後火の手をのびるもさや
も敵はさやもさやも驚き騒いで取物もさやの金も馬
もつて逃るも敵もさや味方の大将李典許褚もさや
とく百騎をさやのさや来ると告ぐ曹操もさや喜ば
ると馬を打て道より行前は何ぞと問ひ答曰く方南

夷陵の大路一方へ北夷陵の山路あり。曹操問て曰く南郡は
 陵へ出んとする所の路もこの近き谷を曰く南夷陵
 の大路の胡荈谷と経て使あり曹操兵を下知して南夷陵
 まで進みしむ。胡荈谷の入り口に諸軍を分ちて先陣の勢を
 せしむ。この馬もよく騎のしむ。先陣の勢を
 くと山をめぐり陣を取らんと掠取たる。さき一の糧を一所
 への兵の持たる。鑼と鐃とてさきで矢も馬を殺し草
 をとりて飢をなせし。湿たる鎧を卸して乾く
 曹操林の下に坐し。天のあやひを大に笑。諸將問て曰く丞相
 さかす周瑜孔明を笑ひしむ。趙雲をいし。生し若干の馬を
 討まし。今又あやを笑ひしむ。曹操曰く。孔明周瑜

が大将の才のあやむ。智慧の足らざるを笑あり。さきも一兵を用
 きのあやむ。一手の勢を伏置し。さきも一兵を用
 いさし。命を逃しん。この人々笑あり。さきの言のあやむ。さ
 四方の百戦の入り地と動し。火の光天をまぶさる。諸軍大に
 る。甲を着きしむ。赤裸を散乱す。曹操の馬
 打乗後をいし。逃るる。敵の勢四方を困んで。人
 の大将一丈八尺の蛇矛を馬に飛して。さきの燕人張飛
 逆賊曹操馬を下りて。縛られし。さきの声雷のいし。さ
 曹操が大將の張飛の名をいし。大に膽をいし。許褚
 いし。鞍のあやむ。馬を飛乗張飛をいし。戦ひし。さきの
 張遼徐晃鎧を固し。馬をあやむ。張飛を推し。西軍入

みだりな戦ひに曹操もろく諸延諸將も且
戦ひ且走る曹操は馬をよむ。とくきたるを待捕兵を
うごかす。手を負ぬ。その一人もあ。前二兩條の路あり。その
南郡の通はる。いかに。何れの路の近きと問ふ。大路の平の
よ。五十里あり。遠く。谷曹操山の上の人々のおせ。路の様を
のぞきし。むむ。その人々を回。山路の方。殺す。火をあげて
敵あり。と。人の大路の方。人のわりの。曹
操。山路と經。落行んと。先手の勢。下知。諸
將問て曰く。山路の華容道と。應。難所あり。と。
火の手をあげて。敵あり。と。人の大道より。土の。曹
操。合て曰く。汝。兵書。虚則実。実則虚。之。の。論。

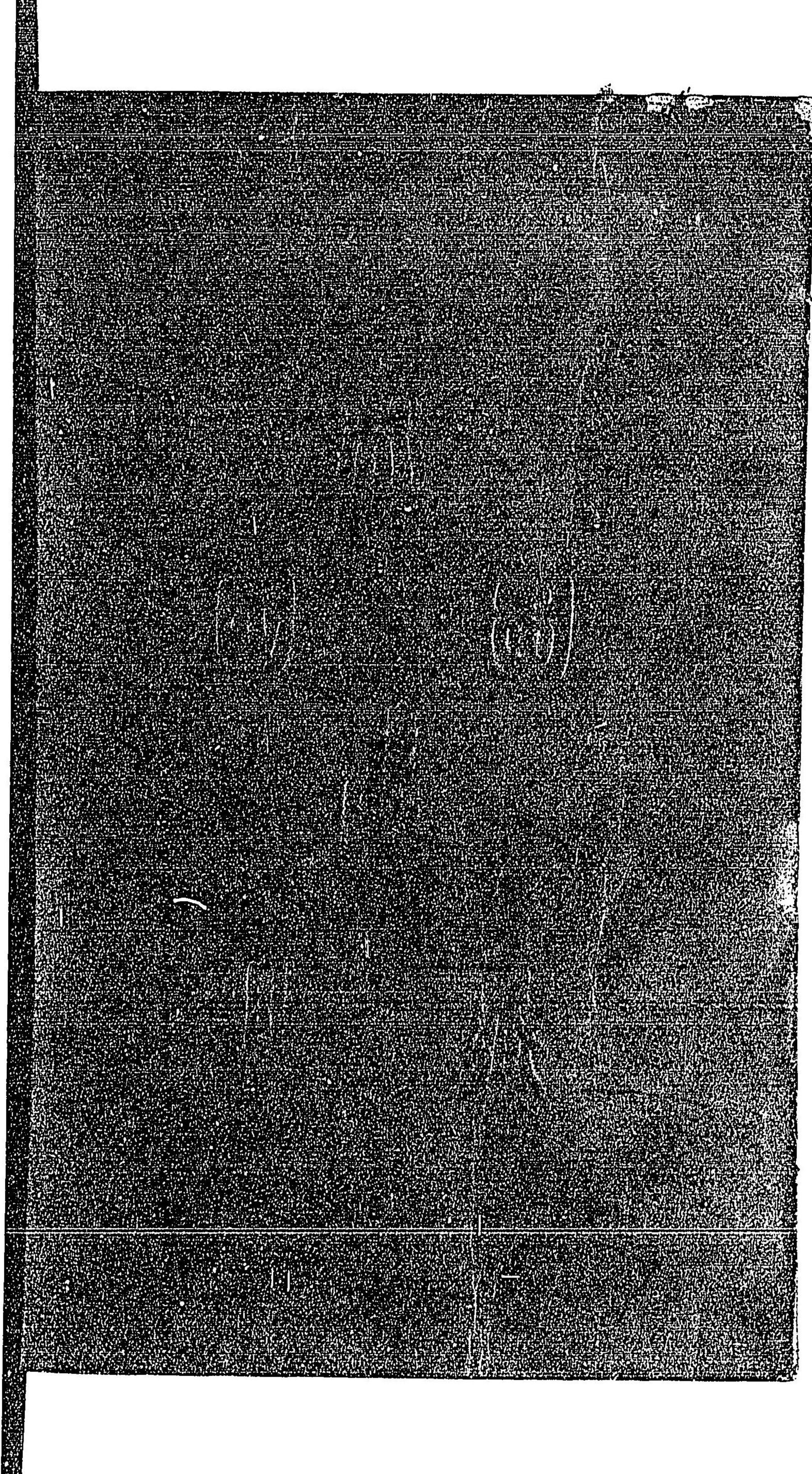
孔明の計。今。ある士卒。命。山路の烟。のげ。人の体。と。大路の條。の
だ。伏兵。の。封止。山路の敵。あり。と。
計あり。今。人。と。大
路より。計。一人。の。封。と。去
る。諸將。拜伏。丞相の妙計。等閑。の。と。華容の山路。の。荆。及。へ。と。志。

繪本通俗三国志四編卷之二終

22

74

28



22
74
28

繪本通俗三國志

田編

二